
もう1つの関ヶ原

バイハ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう1つの関ヶ原

【Nコード】

N 8 1 2 1 M

【作者名】

バイハ侍

【あらすじ】

関ヶ原を舞台にした小説です。詳細は史実と、もしこうなったら…を合わせて作っています。
キャラクターのイメージは極力壊さないつもりです。

石田三成〜決戦前〜（前書き）

オープニングは陣中から始まります。

石田三成〜決戦前〜

「申し上げます！！小早川隊の寝返りにより宇喜多隊、大谷隊は壊滅！
本陣近くにも敵が迫っています！
現在は島左近殿が時間を稼いでおります。一刻も早くお逃げ下さい！」

殿！！

殿！

との…

と…

「殿！…殿！」

「…左近……か…。」

オレは目頭を押さえながら呟いた。

「殿は最近酷くお疲れでございます。少しお休みになられては？」

左近が俺を気遣う。

「いや…今は一番肝要な時…そのような事は出来ない…。」

そう俺は徳川家康を豊臣に仇をなす存在とし各地の大名に文を出した。

そして今各地の大名達がこの地、関ヶ原に集結しつつある。

想像以上の大名が徳川方についたのは誤算だったが、それでも我が軍は10万、に対し徳川軍は8万と数で圧倒的に優位を保ち、決戦の関ヶ原では優位な高地を抑える事に成功している。

「負けるわけにはいかない…いや負けるはずが無い。

義は我らにあり、我が友、大谷の助言を受け磐石の準備を整えている。」

「いや…今は一番肝要な時…そのような事は出来ない…。」

そう俺は徳川家康を豊臣に仇をなす存在とし各地の大名に文を出した。

そして今各地の大名達がこの地、関ヶ原に集結しつつある。

想像以上の大名が徳川方についたのは誤算だったが、それでも我が軍は10万、に対し徳川軍は8万と数で圧倒的に優位を保ち、決戦の関ヶ原では優位な高地を抑える事に成功している。

「負けるわけにはいかない…いや負けるはずが無い。

義は我らにあり、我が友、大谷の助言を受け磐石の準備を整えている。」

石田三成〜決戦前2〜（前書き）

ここよりパレルワールドが展開します。

石田三成〜決戦前2〜

「オレになにか用があって呼びに来たのでは無いのか？」

「実は…殿に会いたいと言っている者がおりまして…。」

左近にしては齒切れの悪い答えだ…。

「オレに会いたいと言っているのは誰なのだ？」

「実は…怪しげな服を着た者でして、追いつ返そうとしたのですが、三成の負け戦を変えてやる！ときかないもので…。」

「オレの負けを？」

「ははっ！面白い！左近案内しろ。」

俺は鼻で笑ったが頭の中ではさっきの夢が離れなかった…。

案内された部屋に男はいた。いや正確には男なのか女なのかさえもわからない。そいつは顔まで隠れるような服を来ており性別、年齢をうかがう事が出来ない。

「おい、人を呼び出しておきながら顔すら見せぬつもりか。」

俺は少し声をあらげた。

「ワタシノ カオヨリ アナタガ シルベキハ ウラギリモノノ
ソシザイ…。 コノママ デハ アナタハ マケル ユメノヨウニ
…。」

石田三成〜決戦前3〜（前書き）

ストーリーへの意見も頂けると光荣です。無理がない範囲で希望の展開も取り入れたいと思います。

石田三成〜決戦前3〜

「な！？なんだと…。」

貴様何故夢の事を！」

まだ誰にも話していない夢の話をされ、オレは狼狽した。

「ソナナコトヨリ イマアナタガスルベキハ イクサニカツタメニ
ウゴクコト。」

ソシテヨク キキナサイ コノアトイツコクノアイダニ デアウモ
ノハ コノイクサヲ サユウスルモノ キヲツケナサイ…。」

そついうと謎の人物は部屋を出ていこうとした。

「待て！なぜお前はそんな事がわかる。なぜそんな話を俺にする！」

9

オレは謎の人物を追いかけた。

「質問にこたえ…。」

しかし部屋の外にはその答えを語る人物は居なかった。

「な…。消えた…。」

石田三成〜決戦前〜

今のはいったい…。

自室に戻ったオレは今の不思議な出来事を思い返した。

イッコクノアイダニ…か…。

「殿！」

その時左近が勢い良く部屋に入ってきた。

「殿！各国の大名が到着されております。ねぎらいの言葉を！」

「わかった…行こう。」

間もなく一刻が経とうとしていた。

謎の言葉を信じるわけではないが、今から会う人物はしっかりと覚えておこう…。

何故かオレはそう感じずにはいらなかった。

そして陣に赴くとそこには既に幾つかの軍が到着していた。この中にウラギリモノ…若しくは戦の鍵になる人物が…。

その時だった。

「石田殿！」

背後から名前を呼ばれオレは振り向いた。

陣中1

「石田殿！」

そこに居たのは宇喜多秀家であつた。

「おおゝ宇喜多殿。今回の陣ぶれ痛み入ります。」

労いの言葉をかけた俺であつたが頭の中では宇喜多に対する疑念が浮かんでいた…。

「なにをおつしやるか石田殿。今回の戦は正しく徳川の謀反！本来であれば大老全員が足踏みを合わせねばならない、この時期に…。

某は討ち死にする覚悟で戦うつもりですぞ！」

宇喜多の…いや宇喜多殿の言葉に俺は胸が熱くなるのを感じた。

この男は信用が出来る…そうだ…元々は義と理の戦い…ならば信用を義掲げて戦おう。

その決心を胸に俺は宇喜多殿に話した。

「宇喜多殿！此度の戦、某の代わりに副将を勤めてくれないだろうか？」

「な、なにを言われるか、そなたの義の名の元に各地の大名が集まっているのだ、本来であれば総大将となるべきを副将すら譲るとは…。」

「いや総大将や副将が倒れれば戦は乱れます。宇喜多殿を信じるゆえです。お考えくだされ…。」

「かしこまった…。では準備もありますゆえ…。ごめん!」

宇喜多殿は自分の陣に戻っていった。

ちようどそこへ左近がやって来た。

「殿! ついに! ついにあの方がお越しになりましたぞ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121m/>

もう1つの関ヶ原

2011年10月7日14時03分発行